

JALプロジェクト「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・交流事業」
二〇一四から二〇二五へ——報告と展望

水谷長志

はじめに

昨年、東京国立近代美術館は国立西洋美術館、国立新美術館、東京文化財研究所とともに「平成二十六年文化庁文化芸術振興費補助金(地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業)」により、「海外日本美術資料専門家(司書)の招へい・研修・交流事業」(通称JALプロジェクト)を実施した「註1」。

本年度も、「平成二十七年文化庁文化芸術振興費補助金(地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業)」を得て、引き続きJALプロジェクトは二年目に入ろうとしている。以下、本プロジェクト誕生の機縁、概要および公開ワークショップ(以下、WS)について、初年度である昨年の模様をお伝えし、あわせて来月十一月に予定されている二年目のJALのプログラムと招へい者(八月十日選考決定)および十一月二十七日(金)に開催予定のWSの計画を紹介したい。

JALとは誰なのか

プロジェクト名称にあるJAL(Japanese-art librarian)とは、海外において日本美術に関わる資料に携わる専門家であり、

国籍は問わない。「日本美術」および「資料」に携わる専門家」という点は、「本プロジェクトにおいては、日本美術の範囲には写真・映像・マンガ・デザイン・建築等の視覚芸術全般を含み、これらに関する視覚資料の扱いを専らとする図書館員ならびにアーキビスト、ヴィジュアル・リソース・キュレータ等も招へいの候補者に含められるもの」とし、募集要項においては、応募資格を次の項目において設定した。

- a 日本国外において右記の日本美術の範囲に関する文献および視覚資料の扱いを専らとする図書館員。
 - b 日本国外において右記の日本美術の範囲に関する文献および視覚資料の扱いを専らとするアーキビスト、ヴィジュアル・リソース・キュレータ。
 - c 日本国外において右記の日本美術の範囲に関する文献および視覚資料を用いて日本研究に従事している者。
- さらに次の二項の条件を付加している。
- ・ 日本語による議論が可能な語学力を有する者。特に日本語での日常

会話ができ、日本語での電子メールでの連絡ならびにワードプロセッサおよびプレゼンテーション・ツールの操作が可能であること。

・ 所属機関からの推薦を受けた者。

JALの目的

JALの目的は募集要項において、東京国立近代美術館ほかプロジェクト参加機関が「今日行っている所蔵美術文献の提供およびライブラリサービスならびに書誌情報の発信が、有効かつ効果的に海外美術関係機関、研究者に伝達されているかを検証するために、海外において実際に日本美術資料を扱う専門家(司書)を招へいし、日本の現況の知悉理解を促す研修を実施するとともに、広く日本側関係者とも交流して、その上で日本の美術図書館が海外からの更なるニーズの開拓を果たすための課題を明確にする

ことにあり……この課題解決は同時に国内美術研究者への情報サービスの向上にも直結するものであると考え」と示している。

- さらに、本事業最終日の昨年十二月十一日に開催された公開ワークショップ「図1・2」の題目を「日本美術の資料に関する情報発信力の向上のための提言」とした背景には、本プロジェクトを通じて、
- 1 日本と海外のJALのネットワークを構築する。
 - 2 海外のJALのネットワークを促進する。
 - 3 日本の美術情報資料の基盤を客体化する。
- という三点の目論見があった「註2」。



図1 WS開会式(左より市川/岩瀬/足立/加茂川実行委員会委員長/藤田/長谷川/吉村/平野、2014年12月11日、東京国立近代美術館講堂)



図2 WSパネルディスカッションの様子

JALプロジェクト誕生の機縁

右にJALプロジェクトの目的と特にそのWSの第三の目論見として「日本の美術情報資料の基盤を客体化すること」があったと述べた。

その理由は、一九八〇年代半ばから、例えば、

- ・一九八四年・東京国立博物館資料館（東京都美術館美術図書室の開室は一九七六年）
- ・一九八六年・国際図書館連盟（IFLA）東京大会美術図書館分科会開催
- ・一九八九年・アート・ドキュメンテーション研究会（現学会）創立
- ・一九八九年・横浜美術館美術図書室開室

などの実績を通じて、日本の美術情報資料の環境の整備開拓が徐々にでも進展しながら、依然、国内においても、ましてや海外関係機関への訴求力においても、一向に向上の気配が見られないことへの閉塞的な気分があったことが大きい。また、九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、各所でのいざさか野放図に作られたかのような多数の美術情報システムが、近年謂ゆる「ガラパゴス（ガラケー）化」していく気配が濃厚であるように感じられてきたことがある。

「日本の美術情報資料の基盤」を「客体化する」ために、外からの目であらためてレビューする機会を設ける。そのためには

海外日本美術関係機関からJALを招き、

日本での視察見学の機会を用意し、交流することによって、この閉塞感がいくらかでも晴らされんことを、JALプロジェクトにおいて目標として計画し、目指した。

ここに私の体験を記すことはいざさか憚られるが、筆者は一九九〇年に米国政府の国際ビジター・プログラムの招きによりアメリカのアートライブラリを当時望みえる最良のプログラムによって視察できた「註3」。その体験が少なくとも東京国立近代美術館あるいは国立新美術館のアートライブラリの開室に役立ったことがある。

また恩師のF先生（図書館情報学名誉教授）が手掛けた海外日本研究図書館の創設と整備の事業（多くは国際交流基金の資金によるものだが）、その一端の北京日本学術センターとローマ国立図書館での作業に連なった体験が、JALという事業の立ち上げを構想させたように思われる。

JAL二〇一四の招へい者

昨年度当初に文化庁からの補助金交付の通達を得て、四月九日に第一回実行委員会開催、五月二十八日に募集要項の告知に至り、八月末日に募集締切。九月八日に招へい者選考委員会によって七名を決定した。JALプロジェクトの開始と募集要項をグローバルかつ応募の可能性のあるJALに情報を的確に伝えるために重

要で効果のあったのが、以下の機関が持つメーリングリスト（ML）への投稿であった。

- ・ 国際図書館連盟（IFLA）美術図書館分科会による「IFLAART」
- ・ 北米美術図書館協会（ARLISNA）による「ARLIS-L」
- ・ 北米日本研究資料調整協議会（ZOO）によるML
- ・ 日本資料専門家欧州協会（EAFRS）によるML

JAL二〇一四のプログラムとワークショップ

初年度招へい者は東京国立近代美術館でのイントロダクションおよびアートライブラリでの研修見学を皮切りに「図3」、同フィルムセンター、国立新美術館、国立西洋美術館、東京国立博物館、東京文化財研究所、国立情報学研究所、国立国会図書館から京都の国際日本文化研究センター、奈良国立博

物館を回り、残りの時間を最終日のWSへ向けた準備に費やした。

WSにおける招へいプレゼンターの氏名（所属）と「提言のタイトル」は次の通りである。

- ・ 長谷川 Sockeel 正子（フランス国立ギメ東洋美術館図書館）「Vera Linhartovaの仕事と蔵書から学ぶもの」

- ・ 岩瀬加奈子（ハワイ大学マノア校美術学部）「海外における日本美術画像資料の利用促進に向けて」
- ・ カワイアイエア・藤田幸代（ホルル美術館図書館）「アメリカ側から見た日本 収集？公開？そして未来へのビジョンは？」

- ・ 吉村玲子（米国スミソニアン協会フリーア美術館図書館）「北米における日本美術研究と図書館：現況と課題」
- ・ 足立アン（フリーランス）「1960-1970年代の実験映画とビデオ作品のアーカイブ、保存と配布：日本に適した取り組みと問題について」
- ・ 平野明（セイーンズベリー日本美術研究所図書館）「日没處の日本美術館」



図3 東京国立近代美術館アートライブラリでの研修風景



図4 岩瀬加奈子氏によるプレゼンテーション・スライド（抜粋）

・市川義則(パリ国際大学都市日本館図

書室)「研究者の視点からの『提言』」。

七名のプレゼンテーションには、「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」が内包されていたが、特徴的であったのは次の三点の指摘である。

第一は日本美術の概説的研究書の外国語(とりわけ英語)への翻訳の必要性(長谷川、吉村)。第二は画像利用に関わるアクセスとユースのための環境整備の必要性(岩瀬)。第三は、欧米の美術関係機関においては学芸部門も図書部門も多くは東洋美術として括られて部局が設置されており、いわゆるCJK(Chinese-Japanese-Korean)が中核となるが、その中で、Jの専門職員が今世紀に入り多くのポジションにおいてCKに替わられている現状があり、将来の海外での日本美術の振興に影響を落としていることが鋭く指摘された(平野)「註4」。

JAL二〇一五の招へい者

初年度が結果としていずれも海外在住の日本人のJAL(JAL)であったのに、本年八月十日の選考会は、七カ国、八都市から九名の日本語を母語としない多様な招へい者が選考された。

以下、応募書類の到着順。

・プラハ(チェコ)国立美術館学芸員兼
司書

・ロンドン(UK)ロンドン大学SOAS

図書館員

・オスロ(ノルウェー)オスロ大学図書館員・博士課程在籍

・ダブリン(アイルランド)チェスター・

ビーター・ライブラリ学芸員兼司書

・オレゴン(US)オレゴン大学図書館員

・ピッツバーグ(US)ピッツバーグ大

学図書館員・博士課程在籍

・ベルリン(ドイツ)国立アジア美術館

美術図書館員

・ソウル(韓国)韓国国立美術研究所

主任研究員

・ソウル(韓国)韓国国立近代美術

館デジタルアーカイビスト

初年度においては、海外における日本美術・資料専門家・日本語という設定はハードルが高く、とりわけ日本語のみでの研究見学およびWSでのプレゼンテーションに二の足を踏んだとの声が聞こえた。その反省を踏まえ、二年目の今年は、研究見学においては日本語で通すが、WSでは英語での発表も可として、言語の障壁をいささかでも軽減した。幸い選考された九名はいずれも日本語能力検定の三級以上(多くは二級、一人は一級)を得ていた。

JAL二〇一五の
プログラムとワークショップ

この九名の招へい者に加え、今年は二

〇一四年に招へいのフリー美術館の吉村氏がプログラムコーディネーターとして参加し、訪問先も早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、九州国立博物館、福岡アジア美術館が増えている。

短時間のイントロダクションから始まる研修と多機関への限られた時間での見学では、「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」を旨とするWSのプレゼンテーションの実現に至るまで、特に昨年と異なり日本語を母語としない招へい者で無事全行程を完遂できるのか、一抹の不安も残るが、実行委員、研究見学先の関係者のご協力となによりも招へい者の高い興味と関心、旺盛な意欲によって多くの課題と困難が超克されることを願っている。

二〇一五年十一月二十七日、午前十時開場、十時半開会―十七時閉幕のWSへ是非ご来場下さることをお願いしたい。JALは適うならば三年の継続を計画しているが、二〇一六年の実現のためにも、今年のプログラムとWSが充実の裡に終了することをさらに期待している。(企画課主任研究員)

註

1 <http://www.momat.go.jp/am/visit/>
<http://bravy/jal2014/>
なお、WSにおけるプレゼンテーションスライドを含んですべてのコンテンツは同サイトに掲載さ

れている。

2 「JAL2014」公開ワークショップ(報告)「カレントアウェアネス-E」二七四号。
<http://current.ndl.go.jp/cae/>

3 「JAL2014」海外日本美術資料専門家司書招へい・研修・交流事業」の顛末一端「アート・ドキュメンテーション」一〇五号、二〇一五年四月。

4 「米国美術館事情 USA-IV 報告 I-IV」現代の眼「四三〇―四三三号、一九九〇年九月―十二月。

5 栗原祐司「米欧における日本美術専門家の育成が急務」新美術新聞「一三六六号、二〇一五年二月一日にも同種の指摘があった。

次号予告 2015年12月号-2016年1月号 12月1日刊行予定

現代の眼 615

恩地孝四郎展

ようこそ日本へ ― 1920-30年代のツーリズムとオリエンタル・イメージ

Review

No Museum, No Life? ― これからの美術館事典

2015年10月1日発行(隔月1日発行) 現代の眼 614号

編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

制作：光村印刷株式会社

発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話 03(3214)2561

表紙：「第5回現代の造形(映像表現'72) ― もの・場・時間・空間 ―

Equivalent Cinema」展(京都市美術館、1972年)会場風景

東京国立近代美術館賛助会員 (MOMAT メンバース)

SEIKO セイコーホールディングス株式会社  鹿島建物  三菱商事